【第七〇回大会を迎えるにあたって】

京都という地域文化

常任委員会
第七〇回（京都）大会実行委員会

地方史研究協議会は、第七〇回大会を二〇一九年一〇月一九日（土）から二一日（月）までの三日間、京都府京都市で開催する。本会常任委員会および地元の研究者を中心に組織された大会実行委員会は、大会の共通論題を「京都という地域文化」と決定した。

本会では、地域に生活する人々の日々の歴史的な営みや交流の解明を通して、各地域の固有性、その歴史的展開を追究する大会を各地において開催してきた。七〇回目を迎える大会を京都においてはじめて開催する。

本大会で対象とする京都は、八世紀末に造営された条坊制に基づく平安京を母胎とする地域である。現在では、世界文化遺産「古都京都の文化財」での登録に象徴されるように国内外において日本文化を代表する伝統文化都市として認知され、観光振興のもと固定化された京都像が先行してイメージされることも少なくない。

しかしながら、京都における文化は、地域に根ざした生活の場において生成された地域文化である。それは朝廷、武家、寺社などの諸権門、そして民衆と、前近代におけるあらゆる社会諸階層によって育まれたという歴史的特質をもっている。また、千年をこえる歴史の中で日本各地に発信され、交流の中で新たな創造を加えつつ、現代まで持続してきた文化といえる。

本大会では、京都における文化の多様性と歴史的重層性の体系を「京都という地域文化」として捉え、その構造を一つ一つ丁寧に解き明かしていくことによって、京都の歴史的個性に迫りたい。京都における文化の生成は、市街地のみならず、その伸縮にともなって変容する周縁地域と、盆地の山裾周辺に展開する別業（別荘）や寺社と密接に関係している。したがって、京都を「都市」として一様に捉えるのではなく、各時期における地域実態に即して考えることが重要である。

京都という地域は、「山紫水明」と呼ばれるように、東西北の三面を山に、南を巨椋池によって囲まれた盆地にあり、大阪湾にそそぐ淀川筋の河川（鴨川・桂川等）を通じた周辺の地域との交流によって都市としての市街地を形成してきた。その市街地は『延喜式』にある「方形の平安京」としては実在せず、数々の戦災や豊臣政権による大改造など人為的、あるいは自然災害によって拡大・縮小しながら輪郭を変えて存在してきた。各時代の市街地の様相は、発掘調査の進展によって、街路や居住形態等

のあり方をもとに具体的に明らかにされつつある。また、新地開発の過程の検討も進んでおり、各時代における周縁地域の様相も捉えることができるようになってきている。たとえば、都市の生活機能を補完し、文化の担い手でもあった被差別民の集落が市街地の周縁地域を移動しながら展開していたことは、「京都という地域文化」を理解する上で看過できないことである。このような理解にもとづき、京都という地域の歴史的動態及び社会構造に留意した文化の生成と展開のあり方をみていきたい。

平安期、天皇・上皇、貴族が市街地の街路を軸として別業を造営し、王朝文化が展開された。平安京中には東寺・西寺のほか寺院建築が許されなかったが、革堂、六角堂、因幡堂などの町堂が存在し、庶民信仰の拠り所として機能した。こうした庶民信仰を基盤としながら、清水寺、鞍馬寺、嵯峨釈迦堂など周縁地域への寺社参詣も盛んとなり、市街地からの参詣道および門前町が整備され、参詣にともなう文化もみられた。

室町期、京都の都市住民の代表といえる「町衆」は、諸権門とも関わりながら神輿渡御・山鉾巡行等から構成される祇園会を催し、御霊会などとともに京都を代表する都市祭礼となった。足利将軍家によって北山殿、東山殿が盆地の山裾に造営され、市街地の会所を舞台に身分にとらわれない文化の融合が進んだ。また、茶の湯・立花・聞香・連歌・能・狂言などが、寄合の文化として盛んとなった。これら京都の生活の場で展開した諸芸能は、寄合の場としても寺院社会と関わりながら、江戸時代には家元制度を確立させ、伝統文化として持続する文化環境を成熟させた。

京都には各宗（各派）の本山が存在したことから、諸国から名所見物を兼ねた参詣者が数多く訪れ、江戸後期になると実地見分をふまえた解説に鳥瞰図を交えた名所案内記が登場し、京都への志向を高めた。また、交通路の発展による物資や人の行き来の拡大は、西陣織や京焼・京野菜などの声価を高め、町人や近隣農村の経済活動を支えた。町人による文化活動は、盛んな出版活動によって全国に影響を与え、心学に代表される新しい思想や独特の文壇・画壇を生み育てた。町人は自治的な活動を通じて都市生活を支え、幕末維新期の混乱を乗り越え、学校や博覧会などによって代表される近代化政策の担い手となった。江戸時代に育まれた町人文化が、近代都市京都を支える市民文化へと受け継がれているのである。

「京都という地域文化」の生成と展開過程の分析は、地域に残された多様な史資料を丹念に追うことで可能となる。そのさい京都では町共有文書が注目されてきたが、長年にわたる調査の進展によって、社会諸階層の諸家文書、寺社所蔵の資料、学校保管資料の重要性が明らかとなっている。その一方で、近年の文化財をとりまく様々な環境変化によって、その保存・継承・公開体制は複雑化しており、京都の地域史研究を進めるためのさらなる環境整備が期待される。

京都の地域特性にもとづく多様な史資料から明らかにされる研究成果を積み重ねることで「京都という地域文化」の理解を深め、京都の地域像を問い直していきたい。各地から多くの参加者を得て、多様な視点から活発な議論が交わされることを期待したい。